

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校校内
 電話:070-1503-6401,044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第108号

シリーズ川崎の歴史を知ろう！
 「川崎の文化財」-8

早野上ノ原遺跡—旧石器時代から近世までの複合遺跡（2） ===川崎市域における旧都筑郡内の遺跡===

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 栗田 一生

今回も、川崎市域における旧都筑郡内の遺跡ということで、前回に引き続き、早野上ノ原遺跡について発掘調査で発見された遺構・遺物等からお話したいと思います。

前回もお話しましたが、早野上ノ原遺跡からは旧石器時代から近世までの各時代における人々の痕跡が発見されています。旧石器時代のものとしては、市内最古級の約3万年以上前の旧石器が出土していますが、まだ部分的な調査しか実施していないため、この地域の旧石器時代については、まだほとんど明らかになっていません。今後の調査成果に期待したいと思っています。

さて、今回お話しする時代は、それから約2万5千年ほど経った縄文時代中期後葉、今から約4,500年くらい前の時代についてです。早野上ノ原遺跡では、2007(平成19)～2009(平成21)年度に実施した発掘調査(早野上ノ原遺跡第1～3次)によって、この時期に建てられたと考えられるたくさんの竪穴住居跡が発見されています。発見されたこれら竪穴住居跡の分布を見ると、ほとんど竪穴住居跡が存在していない広場的な空間を中心に、その空間を囲むように竪穴住居跡が建てられていることが分かりました(第2図)。この住居跡の配置は、この時代によく見られる環状集落という集落の形態ですが、この環状集落はこれまで各地で実施された発掘調査の成果から、最も内側の空間は、ヒスイ製の勾玉や逆さに置かれた土器等が出土する多数の土坑群が見られ、ほとんど住居が見られない墓域もしくは広場(祭祀的空間)、その周囲には住居が配置された居住域、さらにその外側には貯蔵用の土坑群が多数見られるといった、同心円状の構造をもった集落であることが明らかになっています。また、こうした集落の構成には厳しい制約があったと推定されており、住居跡や土坑が同じ場所で繰り返し構築されていることが発掘調査で明らかになっていることから、そのことが裏付けられています。おそらく、現代の私達が想像する以上に、当時の人々は計画的に集落を運営していたものと思われる。その理由としては、当時の温暖な気候による良好な自然環境の下、縄文人が主食としていたクリ等の堅果類やその他の動植物等、以前よりも豊富な食料を手に入れられるようになったことにより、集落の人口が増加したため、集落の維持・運営に社会的な秩序が必要となったことが大きな要因であると思われる。早野上ノ原遺跡は今後の調査によって、丘陵斜面部を利用した集落全体の様相を把握することが可能であるとともに、当時の周辺環境の復元も可能であり、川崎市における当該期の集落を研究する上で貴重な遺跡であるといえます。



第2図 早野上ノ原遺跡における縄文時代中期後葉の環状集落想定図



第1図 早野上ノ原遺跡の位置

早野上ノ原遺跡では、今回話をしてきた縄文時代中期後葉だけでなく、その前後の時期の集落も発見されています。おそらく何十年、あるいは何百年という長い間、人々が継続的にこの地で集落を営み、暮らしていたのでしょう。それは、当時この地が豊かな自然に恵まれ、人々が暮らせる環境があったことの証ともいえます。現在の早野は、都市化の進んだ川崎市内において、かつての自然環境が残る貴重な地域の一つです。早野を訪れると、遠い縄文の世の風景が想像できるかもしれませんね。(つづく)

早野上ノ原遺跡では、今回話をしてきた縄文時代中期後葉だけでなく、その前後の時期の集落も発見されています。おそらく何十年、あるいは何百年という長い間、人々が継続的にこの地で集落を営み、暮らしていたのでしょう。それは、当時この地が豊かな自然に恵まれ、人々が暮らせる環境があったことの証ともいえます。現在の早野は、都市化の進んだ川崎市内において、かつての自然環境が残る貴重な地域の一つです。早野を訪れると、遠い縄文の世の風景が想像できるかもしれませんね。(つづく)

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第78話

徳川入府（4）～領主と農民

小島 一也（遺稿）

現高津区作延の三田家には、三田家だけの検地帳があるそうです。それは「武州橘樹郡稻毛庄作之辺郷御縄打水帳」。検地役人小宮山八左衛門と記されながら、その内容はこの地の土豪「三田筑後」の分のみの水帳で、田畑合計64筆、5町6反3畝。屋敷は6筆で2反7畝19歩。筑後は1反1畝20歩の屋敷に住み、所有地64筆のうち27筆の2町7反余を主作地(小作人を使う)とし、37筆2町6反余を筑後名の屋敷に住む名請人5名に分付地として耕作させており、筑後分は村全体の47%に当たったそうです。

これは文禄三年(1594)の検地で、土農分離で農を選んだ土豪が、戦国以来の従属農民を従えて勢力を保持していた例ですが、作延の三田家に限らず、この時期、この地方の土豪の力は大きく、検地役人にしても、知行を得た領主にしても、これらの者と妥協しながら権力を強めていきます。

私の家には宝暦の頃(1751～63年)の祖先が記した「万記録書留控帳」なるものが残されており(図1)、それは個人が綴った覚書にすぎませんが、その中に上麻生村の領主三井家と村民との関わりを次のように記しています。「慶長二年三月七日麻生郷侍小島隼人佐宅へ三井左右衛門尉御移り、始而武州麻生村而八百石御知行給わる、遠州飛木村に七百石給わり、合計千五百石御知行に被下置候処、御次男有之下郷三百石被仰付候御身分に不相立儀出来に付右三百石御上へ取り上げ～略～ 其後遠州取り上げ知行に替え駿州内瀬戸村、中野郷村、小川村に知行被下置」と三井家の内情に触れ、「右の後、上麻生字山口原草野江御屋敷御殿建差上御住所に相成り候処、其後江戸駿河台に拝領屋敷地被下置候間、被遊候に付、右御殿引出戸駿河台迄大小之百姓に而人馬御住居御屋敷に向い、御上様御出勤被遊候～略～」と村民が屋敷を建てたと述べています。そして「毎年暮餅搗き人足、御法事御葬儀の御事、何人に而も被仰付候丈夫人足差上可申し候、右に付御伝馬二百匹相定候～略～」と仰付次第の夫夫を差し出すことを約しています。

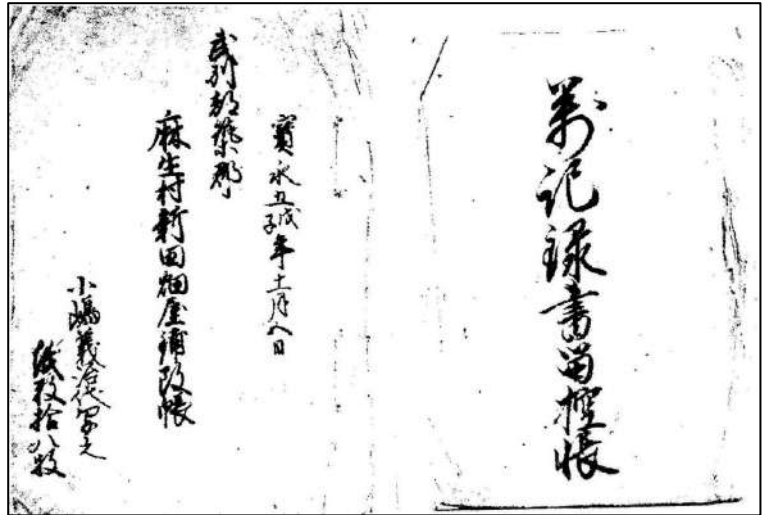


図1 上麻生村の宝永・宝暦記録帳 一小島家蔵一

この上麻生村の領主三井左右衛門吉正は元武田家の家臣で屋敷がなく、麻生の郷土小島隼人(佐渡守の孫)屋敷に13年間寄寓していたと云われ、書留帳によると上麻生には800石(検地は500石)、遠州に700石の知行地を持ち、領地召し上げがあったが、元の知行1500石の旗本と記しており、その間、上麻生領民は村内山口台に御屋敷を建てて差し上げ、駿河台に旗本屋敷を拝領した折は村民挙げてお送りし、以降、御屋敷で人夫等必要の折は、如何様なりともお申し付けに応じます、と約したと記しており、私的な書き留めながら凡その当時の農民と領主との関わりが伺い知れます。

また、この三井吉正は慶長二年(1597)小島家の菩提寺常安寺(妙香山)に寺領6石の御朱印を与えており、上麻生村の領主を続ける三井家は宝永五年(1708)と天保六年(1835)の2回にわたり上下麻生村の鎮守(月読神社)の再建に援助をしており(県神社誌)、さらに三井家は元和元年(1615)上麻生仲村に菩提寺浄慶寺(麻生山)を開基創建しており、後に遠州より火伏の神を勧請して秋葉神社を創建しており(図2)、今も上麻生・岡上などの在家に秋葉講(火伏信仰)が残されています。



図2 上麻生・秋葉神社 一浄慶寺一

麻生周辺の領主の特徴は他にも知行地を持っていることで、これ等の領主は代官を置いたことでしょう。その中で高石の領主加々美家は潮音寺、栗木の領主岡野家は林清寺、早野の領主富永家は戒翁寺を菩提寺としており、領主と農民の繋がりは上麻生の三井家と同様幕末まで続きます。その中で農民にとって一つの改革は「慶安御触書」で、庶民(小百姓)を保護しようとする施策により、前述した三田家のような大庄屋は姿を消していきます。

参考資料:「麻生郷土歴史年表」「川崎市史」「江戸近郊農村と地方巧者(村上直)」

シリーズ

時間と時計の話 第2部

時計と時間の観念(13)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆日本人と腕時計◆

もう一つ別の例を紹介しましょう。1897年(明治30年)8月の『読売新聞』です。同紙に『當世百馬鹿』と題して50回にわたって連載された風刺漫画があるのですが、其十七に「腕時計を見せたがるバカな男」と題して、手首を僅かにめくり上げて腕時計を見せようとする男が描かれています(図1)。この風刺漫画が違和感なく受け入れられているのですから、この頃には輸入物の腕時計が、金持ちの伊達男の間に広まり、その様子が広く民衆にも知られていたことがうかがわれます。当時の読売新聞は、毎日新聞や朝日新聞に比して、後発の新聞で発行部数も少なかったのですが、気の利いた風刺漫画で売り上げを伸ばし始めていたところでした。当時の腕時計の存在を証明する貴重な証拠資料と言えましょう。



図1 當世百馬鹿 腕時計編

ところで腕時計が広く市販されるようになるのは、第一次世界大戦後のことですが、日本では当時の精工舎(現在のセイコー)が国産初の腕時計ローレルを1913年(大正12年)に発売しています。それ故、前号で記した北清事変当時の腕時計は、小型の懐中時計にベルトをつけたり、自分で手首に巻けるようにしたものだっただけです。

北清事変から4年後の1904年(明治37年)に始まった日露戦争は、腕時計の普及を大きく進めることになりました。1905(明治38)年2月16日の『萬朝報』に銀座の天賞堂(時計店です)が佐世保に設けた臨時店舗の広告が掲載されています。それによりますと、「軍人用腕時計」「欧米最新製作精確時計着荷広告(特二陸海軍人ノ必要)」として、時計のタイプと価格が列挙されています。時計のほとんどは腕時計で、銀側の腕時計は13円、10円、8円半、7円半、ニッケル側は6円、白銅側は4円半とあり、銀側懐中時計の方は、18円半~11円となっています。同時代の若い世代の初任給を調べてみますと、帝国大学卒業のエリート、高等文官試験に合格した公務員の初任給が50円、師範学校出身の小中学校教員の初任給は1900(明治33)年までは8円で、翌年からは25%アップの10円でした。ですから、日露戦争の時点で、比較的価格の低い腕時計は、小学校教諭の初任給の半分程度で買えるようになっていたのです。こうなると比較的安価な白銅側の腕時計などは、士官に限らず下士官レベルにまで広まっていた可能性も否定できないように思えます。

天賞堂と並ぶ時計販売の一方の雄、服部時計店はどうかかというところ、1906(明治39)年の営業一覧に、6種類の腕時計を載せています(表1)。それによりますと、「新流行腕輪時計」として、婦人用、軍人用、旅行用、自転車乗用(当時の自転車は一般用ではなく、もっぱらタイムを競う競技用でした)、乗馬用、遊獵用と掲げ、価格は、18金ダイヤ入りの腕時計が120円、ダイヤなしが100円、一番安い金メッキ鎖形は20円としています。この時代、腕時計は超高級ファッションという側面と、軍人やスポーツマン、アウトドア向けの実用品という側面の二方向から社会に受け入れられていった様子が読みとれます。

その後は、次第に低価格の腕時計が増えてきます。1909(明治42)年の服部時計店の銀輪腕時計の廉価品は21円35銭から25円なのですが、1912(明治45・大正元)年となると、呼称も腕時計となって銀輪が外れ、ニッケルから銀、さらには18金までラインアップが増え、価格帯も12円から70円までに広がっています。1913年(大正2年)に精工舎が初の国産腕時計ローレルを発売すると間もなく、腕時計は大衆向けの商品としての地位を確立するに至ります。2年後の1915年(大正4年)には、学生向けの腕時計まで登場します。この時期の天賞堂の営業案内を見ますと、学生用腕時計天賞堂特別注文新品として、ニッケル側が5円から、銀側が8円から、18金側が32円からとなっています(図2)。(続)

遊乗自 獵馬車 用用用		旅軍婦 行人人 用用用		新流行腕輪時計			
		A	A	A	A	番	
		九五	九四	九三	九二	九一	號
		金若	金若	十四金	十四金	十八金	金位
		10	10	10	10	10	形
		鎖形	無地側	無地側	七寶側ダイヤモンド入	無地側	種
						七寶側ダイヤモンド入	目
		貳拾四	貳拾四	七拾五圓	百圓	百圓	價
						貳拾圓	格

表1 1906(明治39年)の服部時計店の営業一覧に見る腕時計の価格表

図2 1915(大正4)年の天賞堂営業案内

小島一也氏の遺稿集
『麻生の歴史を探る』

先年逝去された小島一也氏の遺稿集『麻生の歴史を探る』がご遺族のご尽力により刊行(非売品)されました。

内容は「柿生文化」発行とともに執筆掲載を続けてこられた「麻生の歴史を探る」シリーズの未掲載分を含む全原稿108話をまとめたものです。途中一時的な中断はありましたが、現在までまさに「柿生文化」とともに歩んできた、柿生文化の歴史をも語る内容となっています。先に刊行されました「麻生郷土歴史年表」と併せ、氏の郷土史研究の集大成として輝き続ける金字塔です。

ご希望の方にはおわけいたしております。残部が僅かとなっておりますのでお早めに当史料館へお越しください。



柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

5月 7・21・28日(毎日曜日)

6月 3・17・24日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (5月14日、6月10日は休館です)

柿生中学校創立70周年記念事業協賛企画

第68回
カルチャーセミナー

近代日本の教育制度 ～その2 学歴主義と教育の普及～

日本の近代教育の中に、柿生中学校並びに柿生地域の教育を位置づける試みの第2弾。

日本の義務教育や中等教育は、西欧に遅れて出発しながら、明治30年代中ごろには、就学率98%と、西欧諸国をむしろ凌駕する普及率を誇ります。

何故そうなったかを、学歴主義と絡めてお話しいたします。

講師：小林基男氏 (柿生郷土史料館 専門委員)

日時：5月28日(日) 13:30～ 会場：柿生郷土史料館特別展示室

第12回 特別企画展

「くらしの窓」に見る柿生地区の今昔 ～その1 昭和時代の柿生地区～

「くらしの窓」は昭和30年創刊の地域のミニコミ誌です。昭和の末までに、およそ600号まで発行されました。昭和時代の「くらしの窓」は、柿生地区のどのような姿を捉えていたのでしょうか。その捉えてきた地域の姿をご紹介します。

期間:3月19日(日)～6月24日(土) 場所:柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。

詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

柿生文化原稿募集

柿生郷土史料館では機関紙「柿生文化」への掲載原稿を募集します。身近に眠っている郷土の歴史・民俗・文化等をご紹介いただければ幸いです。詳しくは、下記またはHPお問い合わせへご相談ください。

◆ 全面記事：1,600字程度＋写真、図

問い合わせ先：有泉(柿生文化編集担当)

◆ コラム：600字程度＋写真、図

090-7630-4775